

# 則天去私とは何か

———— 『高慢と偏見』、『ウェイクフィールドの牧師』、『明暗』 ————

佐藤 深雪

## What “Sokutenkyoshi” is : *Pride and Prejudice, The Vicar of Wakefield, and Meian*

Miyuki SATO

The “sensation of reaction” is a concept proposed by Charles Sanders Peirce (1839-1914). It is classified as Secondness. “Second is the conception of being relative to, the conception of reaction with, something else” (Peirce 1891: 175). I propose a hypothesis that the pair of “Jikohoni” (self-centeredness) and “Sokutenkyoshi” (selfless devotion to justice), which was a lifelong key concept of NATSUME Sōseki (1867-1916), is deeply connected to “Sensation of reaction”. Sōseki said “Sokutenkyoshi” was reflected in *Pride and Prejudice* (1813) and *The Vicar of Wakefield* (1766). In *Meian* (1916), he tried to do the same.

Can we interpret the three works by the concept of “Sensation of reaction”?

In Section II, I define the meaning of “Jikohoni” and “Sokutenkyoshi” in *Bungakuron* (1907), Sōseki’s most important document of literary theory, and compare them to Peirce’s concept. In Sections III, IV and V, I interpret the three works based on the “Sensation of reaction”.

I conclude that “Jikohoni” and “Sokutenkyoshi” discussed in *Bungakuron* are comparable concepts to “Sensation of reaction” and constitute the structure of discourse realized in *Meian*.

I. はじめに

II. 反動の原理

III. 『明暗』

IV. 『高慢と偏見』 付自由間接話法

V. 『ウェイクフィールドの牧師』

VI. おわりに

I. はじめに

夏目漱石が晩年に提起した則天去私について従来さまざまな検討がなされているが定説はないようである<sup>1</sup>。則天去私に関する資料は、最晩年の木曜会での漱石の発言を弟子の立場から記録したものにはほぼ限られているという<sup>2</sup>。どの伝聞にもそれぞれ信憑性があるが、本論では古くからの高弟であり、聞き書きの周辺事情を含めて記している久米正雄と松岡譲の記述を参考にすることにしたい。

久米(1916)は、次のように述べている。

先生は例によつて色々話したが、最後に此頃の先生が悟入(厭な語彙だが)し得た宗教味を帯びた人生観に就て、真面目に話された。「私」のない芸術、筒を空うすることによつて全に達すると云ふ人生観、禪で所謂禪定、三昧の境

地。(中略)然し今日の言葉で禪の世界観と異なる所以も幾分か解つたやうな気がする。先生が其「悟り」を得たのは極く最近だと云ふ。而してまだそれを外部に説明するほどの余裕を得てゐないと云ふ。兎に角先生が宗教的に傾いて来た事は驚くべき事である。併し更に驚くべき事には、もう一二年後にはその世界観に基いた文学概論を大学で講義してもいゝと云ふ意を洩らされた事である。先生がさう云ふ気を起された事は近年にない事であらう。(久米 1916=1922: 287-288)

松岡譲の1933年の回想には次のようにある。

「則天去私」のお話は二度ばかりあつた。別に先生があのように急に逝かれようとも思はず、

いづれ新しい大々的な組織理論の文学論が、何かの機会で纏めて聞ける事とばかり思つて居たので、私達は詳しく先生からそれを聞かずに了つた。が、一度誰やらがさういふ作品の例はとお尋ねした時に、『ヴィカー・オヴ・ウエークフィールド』とか『プライド・アンド・プレジューデイス』などをあげられた事を覚えてゐる。さうして其の意味は、「自然随順」や「自然法爾」とかいふ意味に似て居つたと思ふが、この短い当時の印象を心覚え風書きとめる文章に、先生が一生をもつて達しられた人生観上芸術観上の極点を、いゝ加減に揣摩憶測する不謹慎はよさう（松岡 1986: 154-155）。

久米の日記は唯一漱石存命中の記録であり、松岡の回想は1916年の漱石の死から時間を隔てている。しかし、ほかの資料に比べて二人の回想には共通点が多く、漱石山房での会話の雰囲気をよく残している点に信憑性がある。その論点を本論では三つに整理しておきたい。

第一は、則天去私によって、1907年の『文学論』を凌ぐ、あるいはそれを継ぐ新しい文学論を企画していたという点である。久米は、此頃の先生が悟入し得た、最近の世界観にもとづいた文学概論を大学で講義したいと述べていたと伝え、松岡も同じ内容を次のように詳しく伝えている。

今度の『明暗』なんぞはさういふ態度で書いてゐるのだが、自分は近いうちにかういふ態度でもつて、新らしい本当の文学論を大学あたりで講じて見たい。といつて昔講じた文学論が元々意にみたないから、その不名誉の償ひを今しようといふのではない。それはそれで、すでにかいてしまつた恥であつて、今更どうにも仕様がなないが、かうした人生観文学観を確立して、それを人に伝へないのは甚だ相すまない次第だ。が、それが義務だとか責任だといふのではなく、言つて見れば天が私にそれを命じてるやうな気がしてならない。是非纏めて君達始め天下の有識者諸君から聴いて貰ひたいと思つてゐる。（松岡 1986: 214-215）

漱石が英国留学中に『文学論』を企画したとき、その出发点は自己本位であつた。「私の個人主義」

(1914)には、「一口でいふと、自己本位といふ四字を漸く考へて、其自己本位を立証する為に、科学的な研究やら哲学的の思索に耽り出した」(16:595<sup>3</sup>)とある。一方、則天去私によってもう一度文学論を講義したいというのは、不本意のまま出版された『文学論』<sup>4</sup>を則天去私が何らかの形で補い完成させる意義を持っていたからだろう。晩年に企画された新しい『文学論』は、1907年の『文学論』との対比のもとに、いいかえれば則天去私と自己本位との一対性のもとに<sup>5</sup>、『文学論』にそくして考察されなければならない。これが第一の論点である。

第二は、則天去私には禅あるいは宗教的な境地に近いものでありながら、それとは明らかに異なるものであるという点である。久米は、「然し今日の言葉で禅の世界観と異なる所以も幾分か解つたやうな気がする」(久米 1916=1922: 288)と述べている。松岡は自身が宗教的な問題に興味をもっていたことから漱石に宗教的問答を投げかけた。そのなかで久米との共通性から注意されるのは、次のような二つの間いである。

—— 芸術家のフィロソフィーを見ても、その哲学は初めはロマンチックで、中頃は倫理的になり、それから最後には宗教的になるといふ風に感じられますが、何だか先生なんぞの行き方もそんな風ぢやないんでせうか。

「それは文学者だけに限つては居まい。大体に於て人間はさういふ経路を辿るものなんだらうね。しかし自分のやうな多少ともに文学の道に携はつたものは、救ひといふやうな事でも、宗教家が夢想するやうに、一律一体に全人類が一時に救はれるなどは考へない。救ひといふ事と悟りといふ事とが、大体同義語に思はれるんだね。」

—— すると絶対者の中にうけとられるといふ浄土教的な他力主義でなく、自ら悟りをひらいてそれで救はれようといふ禅的な、謂はば自力主義なんですか。

「自力とか他力とか、さういふ抹香くさい用語は、非常にはつきりして居るやうで、其实誤解が生じ易いが、始めから絶対者を予定しなかつたつて、境地としてはさういふところ迄行かなければ、救ひにはならないのぢやないかな。だから理性的な僕等は超越的な神なんぞを考へ

る事が出来ない。さうして内在的に見て行けば又必要もないわけだ。但し自覚の絶対値といふか、見性成仏といった悟りの極致を神とか仏とかいふのなら、そりやいつてもいゝだらう。」(松岡 1986: 211-212)

則天去私は、全人類が一律一体に救済されるような宗教家の夢想ではなく、どこまでも個別の救いであり悟りである。そして、宗教とは違って他力自力の区別も絶対神も必要ではないが、結果として宗教的な救いや悟りときわめて近いものである。則天去私の非宗教性が第二の論点である。

第三は、則天去私の具体例として、ジェイン・オースティンの *Pride and Prejudice* (『高慢と偏見』) とオリバー・ゴールドスミスの *The Vicar of Wakefield* (『ウェイクフィールドの牧師』) が漱石から示され、『明暗』も同じ態度で書いているという点。この書名は久米の回想には出てこないが、岡 (1916) や松浦 (1922) に同じ証言がある。具体的な作品を漱石が例示していることから、従来からさまざまな解釈が試みられている。しかし、『明暗』を含めた三つの作品を統一的な原理にもとづいて論ずる先行研究は、管見の限りでは見いだすことができない<sup>6</sup>。

本論は、以上の三つの条件を満たす則天去私についての仮説を提起し、その妥当性を検討することを課題とする。

『文学論』第5編によれば、「一時代の集合意識が如何なる方向に変化して、如何なる法則に支配せらるゝかを論ずるは此章の目的なり」、「一時代に於る集合意識の播布は暗示の法則に由つて支配せらる」と述べて、『文学論』が暗示の法則一つによって貫徹されていることを宣言している。暗示の法則については、佐藤 (2014) に詳しく述べたので、ここでは結論だけを略述する。

暗示の法則とは、チャールズ・サンダース・パースの哲学を特徴づける第三の推論形式であるアブダクション (仮説推理) である。パースは、過去からの暗示 (習慣性) と、未来のさまざまな可能性の中から当てずっぽうに (偶然性) 一つを選んで引きよせる (自発的) 暗示とがあわさってアブダクションが成り立つという。つまり習慣・偶然・自発の三極構造をもつのがアブダクションである。

一方、漱石は『文学論』第5編で予期・突然・漸次という三極構造によって暗示の法則を説明してい

る。禅の頓悟の例では、悟りに近づこうと意図して (予期)、長い努力を続け (漸次)、不図した機縁に導かれて (突然) 頓悟する。つまり、長く続く意図された修行だけでは悟りは得られず、偶然のきっかけに導かれてはじめて悟りは訪れる。宗教にきわめて近くありながら宗教とは異なるその一般法則を漱石は見出そうとしている。パースと漱石両者に共通するこの三極構造によって、受動的 (偶然) でありながら同時に能動的 (自発) でもある人間の自由が確保される。

ところで、則天去私が私を去った受動性によって特色づけられるとすれば、自己本位は私の能動性によって特色づけられる。受動性と能動性とが矛盾なくともに働くために、パースと漱石はこの三極構造に一つの工夫を加えている。すなわち、習慣 (予期) が受動性の原理であるとすれば、偶然と自発 (突然と漸次) は能動性の原理であるが、偶然と自発 (突然と漸次) という相反する様態が一致する論理を、パースは reaction、漱石は反動という用語でそれぞれ説明している。reaction (反作用) とはパースの記号のカテゴリーのいわゆる第二性 —— 二つのものを関係づける感覚 —— である。パースと漱石に共通するこの反作用 = 反動によって、偶然と自発 (突然と漸次) が一致するとき、能動的でありながら同時に受動的でもある人間の自由な行為が成就する。以上がパースに導かれた漱石の暗示の法則の構造であり、本論はその核となる反動の原理を検証する。

本論文は以下の構成をとる。Iでは、問題の所在と目的を述べた。IIでは、『文学論』における急な心変わりの例を検討し、反動の原理を明らかにする。III、IV、Vでは、『明暗』、『高慢と偏見』、『ウェイクフィールドの牧師』について、それぞれ反動の原理にそくして解釈できるかどうかを検討する。VIでは、予期・突然 = 漸次 (習慣・偶然 = 自発) の三極構造の要となる反動の原理こそが、自己本位と則天去私とを矛盾なく結びつけ、オースティンとゴールドスミスとその典型として提示させた『文学論』の根本原理であると結論する。

## II. 反動の原理

「創作家の態度」(1908) は、これまで注意を払われて来なかった文学の新しい材料として次のような

話を掲げている。

ある芸妓が、ある男と深い関係になつてみたのだそうで。其兩人がある時船遊びに出ました。そこいらを漕ぎ廻つた末、都合のいゝ磯へ船をもあいまして、男が舟を捨て、岸へ上がりました。所が岸辺に神社か何かあると見えて、磯からすぐ崖になつて、崖のなかゝら石段が、海の方へ細長くついで居ります。男は其石段を登つたんださうです。女は船のなかゝら、石段を上つて行く男の後姿を見て居たさうです。其後姿をみてゐた時、急に自分の情夫に愛想をつかして仕舞つたんだと友人は話しましたが、其原因は私にも、友人にも、本人の芸者にも無論分りません。是と類似の例をジェームズの宗教的経験と云ふ本や、スターバックの宗教心理学で見た事がありますが、個人の経歴譚として聞いたのは是が始めてゝあります。(16: 248)

急に心変わりした女とは、『明暗』(1916)の清子に他ならない。『明暗』は、延と結婚している津田がかつての恋人清子の心変わりの理由を問ひ質すために温泉場へ出掛ける話である。そして、突然の心変わりは、すでに早く『文学論』(1907)において懸案のテーマであつた。以下では、『文学論』で提起され、「創作家の態度」を経て『明暗』まで持ち越される急な心変わりのテーマに注目し、このテーマの重要性と意義を明らかにしていきたい。

『文学論』第5篇は「集合的F」と題され、それまでの個人の意識の焦点Fに対して、一時代の集合的意識の焦点Fを扱う章である。その意識推移は暗示の法則に従うとあり、『文学論』は複雑に見えてじつはただ一つの法則によって貫徹されている。第5編第5章は、「意識推移は次第である」という原則を説明する章であるが、その中で説明を要する特殊な例として反動の推移が取り上げられている。反動とは、外部から見ると突然であつても内部では次第であるような推移である。この第2章の定義を受けて、第5章では、反動についてさらに詳しく四つに分類している。第一は急激な意識変化による反動。第二は、外部から強烈な刺激を受けたときの反動。第三は、内面の進行と外面の進行が対照的性質をもつときの反動。第四は、第一と第二をあわせた反動。このうち第三が反動の典型である。

推移はかくの如く次第あり、順序あるにも関せず、外部にあらはれたる動作のみより之を論ずれば、金蘭の愛を一朝に変じて千古の恨となすの観あり。此観あるの点に於て此推移は正しく反動なり。(14: 486)

この第三の反動の説明は、第2章の定義に反するものではないが、第三の説明のあとにさらに、この反動では説明がつかない突然の心変わりの例が括弧で括られて示されている。

(例外の反動にして此原則を応用する能はざる場合あり。愛の何等の源因なく突然として憎に変じ、憎の寸毫の理由なきに愛に変ずる場合を云ふ。Prof. Jamesは其著 *The Varieties of Religious Experience* に於てかゝる例を挙げたり。(一七九頁)曰く某なるものあり、二年間一女子を愛したるに、一日忽然として其愛を失却して遂に回復するを得ず。女より寄贈せる手翰及び物品を悉く火中に投じて已めりと。Starbuckは之に反して其著 *The Psychology of Religion* (一四一頁)に、憎念の突如として愛情に変化せるの例を引けり。曰く某あり。知る所の女教師某を厭ふ事甚し。一日兩人廊下にて、はたと出会う。女教師に特異の挙止動作あるにあらざりしも、其時より不図之を慕ふに至れりと。斯の如きは漸移の原則を以て説明すべからざるが如し。Jamesの解釈によれば此現象を以て識域下の胚胎となすに似たり。是漸移論を識域下に応用せると異なるなし。只識域下の事に関しては漸移を立すると共に何事をも立し得べくして、而して遂に之を驗するの期なきが故に余は此説の余に近きにも関はらず、賛否を表する能はず。Starbuckは此現象を以て特異なる脳作用が無意識に発達して潰裂せるものとす。此説の当否は門外漢たる余の知る所にあらず。(下略))(14: 487-488)

ジェームズの説明によれば、これは識域下(無意識)の胚胎である。スターバックの説明によれば、これは特異な脳作用の潰裂である。しかし漱石はそのどちらに対しても慎重に判断を保留している。無意識の心理学や脳生理学にもとづいた説明を漱石はとらない。漱石がよって立つのは暗示の法則と呼ん

だ意識推移の原則のみである。

『文学論』のこの箇所にはやや混乱があるようであり、反動の四つの説明のうち第一では反動と突然の違いが説明され、第三では反動の典型が説明されたのちに、例外として突然の例が載せられている。つまり反動と突然の説明は二重になされている。

まず、第一の説明を確認しておこう。

所謂反動なるものの、実は漸次の推移に過ぎざるは前に述べたるが如し。俗間誤つて突然となすは、両者共に推移の過程順序に於て異なるなきに因はず、只其過程順序をつくすの時間に於て大差あるに因らずんばならず。而して此時間的差違を来すものは当下意識の強度による。(14: 484)

反動と突然は、推移の過程・順序においては同じだが、推移の速度において違いがあり、反動には長い時間がかかり、突然には短い時間しかかからない。前者は意識の強度が弱く、後者は意識の強度が強い。さらに、意識推移が速やかであるときには、途中の過程部分を閑却してしまい、はじめと終わりだけが意識されるので突然に見えるのだという。つまり、推移の速度が速いために突然に見えるが、反動と突然は同じであるというのが第一の結論である。

次に、第三の説明を確認する。ジェームズとスターバックが挙げた例は、第一の結論では説明がつかないために例外とされている。つまり、ほとんどの場合は反動＝突然で解釈できるが、例外的に反動≠突然である場合があり、これこそが急な心変わりの例である。しかし『文学論』ではその解釈は保留されている。

さて、「創作家の態度」の例を再度注意深く読むと、手掛かりが発見されているように見える。急な心変わりを個人の経歴譚として聞いたのははじめてであるとあるように、その状況が詳しく語られている。女の心変わりは、「船のなかから、石段を上つて行く男の後姿を見て居たさうです。其後姿をみてゐた時、急に自分の情夫に愛想をつかして仕舞つたんだ」(16: 248)とある。つまり、急な心変わりは、石段を上っていく男の後姿を距離を隔てて眺めている間に起きた。

漱石の小説のなかで、このような用例をさがすと、いくつかの例が得られる。

三四郎が池の端で女を見つめていたとき。

二人の女は三四郎の前を通り過ぎる。若い方が今迄嗅いで居た白い花を三四郎の前へ落して行つた。三四郎は二人の後姿を凝と見詰めて居た。看護婦は先へ行く。若い方が後から行く。華やかな色の中に、白い薄を染め抜いた帯が見える。頭にも真白な薔薇を一つ挿してゐる。其薔薇が椎の木陰の下の、黒い髪の中で際立つて光つてゐた。(5: 302)

野中宗助が友人安井の門口ではじめてお米を見かけたとき。

彼は格子の前で傘を畳んで、内を覗き込んだ時、粗い縞の浴衣を着た女の影をちらりと認めた。格子の内は三和土で、それが真直に裏迄突き抜けてゐるのだから、這入つてすぐ右手の玄関めいた上り口を上らない以上は、暗いながら一筋に奥の方迄見える訳であつた。宗助は浴衣の後影が、裏口へ出る所で消えてなくなる迄其処に立つてゐた。それから格子を開けた。玄関へは安井自身が現れた。(6: 525)

池の端をめぐる散歩道、あるいは門口から裏口へ一筋に続く通路のような空間が、運命の女との出会いの場所に選ばれている。そこには後姿を眺めるためのいくらかの距離と、帯や浴衣の柄を仔細に観察するだけの間がある。これが急な心変わりが起る空間的・時間的条件である。つまり、内的には非常に長い時間に思えるが、外的にはほんの一瞬でしかなく、内的と外的とのずれがある。ここまでは反動と突然は等しい。

違いが明らかになるのは『門』の例である。『文学論』では、反動と突然とは長い時間が短い時間かの違いであって、結果は同じところに着地するように考えられていた。しかし、『門』では、不慮の出来事の結果、二人は思いもかけない境涯へ拉致され、倫理的な罪悪を感じるより先に、まずその不可思議さに茫然としなければならなかつた。突然とは、説明できない不合理であり、運命の気紛れな不意打ちである。ジェームズの用例が突然の心変わりと言いつつ、じつは宗教経験における回心の用例であつたことを見るなら、この思いもかけない境涯への拉致

は、突然と反動との根本的な違いであると考えなければならぬ。反動の出来事が長い時間をかけて前もって予期したところに着地するとすれば、突然の出来事が着地するのは、それまで考えもしなかった未知の場所である<sup>7</sup>。『門』では、そのありさまを「大風は突然不用意の二人を吹き倒したのである」と言い、「残酷な運命が気紛に罪もない二人の不意を打つて、面白半分筈の中に突き落したのを無念に思つた」(6: 534)と言っている。『門』は、突然の心変わりによって潜んでいる偶然性と受動性を明らかにした。

ここで漱石が参照したと考えられるパースの reaction について説明を加えておきたい。Monist (1891) に掲載された「理論の建築」には、「心理学に目を移すと、精神の基本的現象は三つのカテゴリーに整理しうることが分かる。」とあり、第一は感情、第二は反作用の感覚、第三は一般的概念である。その第二を引用する。

感情に加えて、さらに、反作用（反応）の感覚がある。これは、たとえば、目隠しされた人が不意にポストにぶつかったときや、筋肉労働をするときや、あるいは、感情が移り変わるときに感じられる。わたしの心が憂鬱の感情で占められていたところ、突然、それが激怒の感情に取って代わられたと仮定してみよう。この推移の瞬間に一つのショックが、反作用の感覚が生じ、わたしの憂鬱一色の生は激怒一色の生に変質するであろう。(中略)しかし、反作用の感覚は、それが関係する憂鬱と激怒との二つの感情が現存するときを除き、存在しえない。われわれが二つの感情をもち、どんな仕方にせよともかく、その両者の関係に注意を払うばあいには、いつでも上述の感覚が生じるのである。(中略)したがって、反作用の感覚とは感情間の結合ないし比較の感覚であり、それは、(A) 二種類の感情間においてか、あるいは、(B) ある感情とその感情の欠如、ないしその感情の軽度の存在とのあいだにおいてか、どちらかの関係において成り立つ。そして、B のばあいは、まず最初に、感情の爆発の感覚が、つぎに、感情の鎮静の感覚がえられる。(パース 1982: 211-212)

Besides Feelings, we have Sensations of reaction; as when a person blindfold suddenly runs against

a post, when we make a muscular effort, or when any feeling gives way to a new feeling. Suppose I had nothing in my mind but a feeling of blue, which were suddenly to give place to a feeling of red; then, at the instant of transition, there would be a shock, a sense of reaction, my blue life being transmuted into red life. [...] But the sensation of reaction cannot exist except in the actual presence of the two feelings blue and red to which it relates. Wherever we have two feelings and pay attention to a relation between them of whatever kind, there is the sensation of which I am speaking. [...] The sense of reaction is thus a sense of connection or comparison between feelings, either, A, between one feeling and another, or B between feeling and its absence or lower degree; and under B we have, first, the sense of the access of feeling, and second, the sense of remission of feeling. (Peirce 1891)

反作用の感覚とは、目隠しされた人がポストにぶつかってびっくりするときや、筋肉労働をするときの筋肉の抵抗感、憂鬱から激怒へ感情が移り変わるときのショックの感覚である。つまり急な心変わりへのパースの説明がこの反作用である。憂鬱と激怒とは、英文では a feeling of blue, a feeling of red とあり、この興奮色の赤と安静色の青は、『それから』(1909)の代助がふと思ひ出した、「ダヌンチオと云ふ人が、自分の家の部屋を、青色と赤色に分つて装飾してゐると云ふ話」(6: 14)に対応するのではないか。ダヌンチオは、心理学者の説を応用して、興奮を要する部屋を赤色に、安静を要する部屋を青色に塗つたという<sup>8</sup>。

パースの反作用の感覚は、「それが関係する憂鬱と激怒との二つの感情が現存するときを除き、存在しえない」とあるように、事前事後では感覚として存在することができない。『それから』が事前から眺めた反作用を描いているとすれば、『門』は事後から眺めたそれを描いている。『それから』では世の中が真赤になって代助の頭の中で回転するが、『門』では退色している。すなわち、「斯く透明な声が、二人の未来を、何うしてあゝ真赤に、塗り付けたかを不思議に思つた。今では赤い色が日を経て昔の鮮かさを失つてゐた。互を焚き焦がした焔は、自然と変色して黒くなつてゐた」(6: 528)とある。

この人を思いもかけないところへ拉致する赤について蓮實重彦は次のように述べている。

実際、代助は、フィクション的な存在として、『それから』をフィクションとして成立させている論理の中に身を置き、「不動」／「運動」、「目を閉じる」／「目を開く」、「無色」／「有色」、「雑色」／「一色」、「青」／「赤」という五つもの対立軸の後者ばかりを周到に選択している。「運動」、「目を開く」、「有色」、「一色」、「赤」という一貫した選別の確かな主体として、ここでの登場人物はいささかも「狂気に触れあわん」としてはいない。(蓮實 2007: 151)

代助が一つ一つ確かな主体としてここまで自分の選択をしてきたことが確認されている。にもかかわらず、その選択の結果として現れるのは、代助の予想を超えた思いもかけない境涯である。あるいは、「代助は二人の過去を順次に遡ぼって見て、いづれの断面にも、二人の間に燃る愛の炎を見出さない事はなかつた」(6: 236) と言っている。一つ一つの断面には間違いなく愛があったのに、結果、三千代は違う相手と結婚している。『明暗』の津田が引き継ぐように、一つ一つは自分の選択に間違いのないのに、思いもかけない相手と結婚している、これがパースと漱石に共通する反動＝反作用の構造である。

『それから』はそれを予兆として、『門』はそれを過去の経験として描いた。それでは文芸は、いまここにはないその経験を描くことができないのだろうか。おそらくここから漱石はパースの哲学を離れ、オースティンを発見することによって、その経験を書くために『明暗』が計画されることになるが、まずは、反動＝反作用の原理によって『明暗』が解釈できるかどうかを確認していこう。

### Ⅲ. 『明暗』

『明暗』は、突然と反動の原理をそれぞれ清子と延とに書き分けた作品であると考えられる。たとえば、後姿を眺めている間の心変わりともまったく同じ状況が、『明暗』では延の細工として描かれている。「又何か細工をするな」(183- 666) というのが津田の延に対する評である。

角を曲つて細い小路へ這入つた時、津田はわが門前に立つてゐる細君の姿を認めた。其細君は此方を見てゐた。然し津田の影が曲り角から出るや否や、すぐ正面の方へ向き直つた。さうして白い織い手を額の所へ翳す様にあてがつて何か見上げる風をした。彼女は津田が自分のすぐ傍へ寄つて来る迄其態度を改めなかつた。「おい何を見てゐるんだ」

細君は津田の声を聞くと左も驚ろいた様に急に此方を振り向いた。(3- 9)

延は、曲がり角から門口までの間、自分の後姿を津田に眺めさせている。束の間起こるはずであった運命的な恋を、人為的に引き起こそうとしていると考えられるだろう。「自分の斯うと思ひ込んだ人を飽く迄愛する事によつて、其人に飽く自分を愛させなければ已まない」(78- 262)、「其人の料簡一つで、未来は幸福になれるのよ。屹度になれるのよ。屹度なつて見せるのよ。」(72- 242)、「冒頭から結末に至る迄、彼女は何時でも彼女の主人公であつた。又責任者であつた。」(65- 216) という延には強い自己本位の主張がある。

また、津田はよく延に不意を突かれた。「彼が玄関の格子へ手を掛けようとすると、格子のまだ開かない先に、障子の方がすうと開いた」(14- 41)、あるいは、「不用意の際に、突然としてしかも静粛に自分を驚ろかしに這入つて来るお延の笑顔」(98- 330) という描写もある。津田は常に相手より先回りしようとする延の所作を、訝えているとも気味悪いとも見ている。そして、延は「津田に一寸の余裕も与へない女であつた」ゆえに、津田は「彼女に挑戦すべく緊張の苦痛と努力の窮屈さ」(185- 672) を強いられたとあるように、延の所作には、緩慢と評される清子に比較して速度がある。そのために延の所作は津田を驚かせ目を眩ませる。

内側と外側がまだ一致しておらず、上部は大変丁寧で、お腹の中はしっかりし過ぎるくらいしっかりしている(142- 500) というのは吉川夫人の見立てであるが、この速度によって延には内面と外面との落差が生じやすい。一方、緩慢な動作ゆえに清子には内面と外面の落差が生じにくい。その結果、清子の内面を書くことは難しく、延の内面はずれや細工として書くことができる。

延に与えられているのは、自分自身が自分の主人

であって、結婚という幸福を自分の思うままに手に入れようとする、内面をもった近代人の役割である。じつは、『三四郎』の美禰子も同じように野々宮との結婚を細工し、失敗した女性であった。池の端で三四郎に花を落として気を惹いた時、同時に池の向う側にいた野々宮にそれを見せる細工をしていたという説がある<sup>9</sup>。急な心変わりが起こる状況を細工によって作り出そうとして失敗する女の系譜上に延はいる。延がその先へどこまで進んでいくことができるかが『明暗』の一つの課題である。

一方、緩慢な動作を特色とする清子は、単純で淡泊で鷹揚であり、津田は、「延に対する時の用意を取り忘れて」、「伸び伸びした心持で清子の前に坐つてみた」(185-672)。清子にとって驚きは驚きであり平静は平静であって、そこには理由も心理もない。「たゞ昨夕はあゝで、今朝は斯うなの」(187-683)と言うばかりである。清子は外部と内部のずれがないために、外部からも内部からも描くことができない対象である。清子の外面は「相変わらず緩慢だな」(183-666)という津田の評に尽きているのであり、またその内面が自由間接話法によって読者に示されることもない。そのために宙返りを打って関と結婚した清子の所作を間近に見ても、津田はまったく理解できない。「作家の態度」に言われていたように、突然の心変わりは、語り手も聞き手も当の本人でさえその心理や理由を語るができない。

『明暗』187回のなかで、清子が登場するのは176回である。このあと『明暗』がどのくらいの回数を重ねる予定であったかを知ることはできないが、清子の突然の心変わりが意識推移の原則から見て希少な例外であるなら、清子はこの先も心変わりの理由を語ることはないと考えられる。とすれば、清子はすみやかに温泉場から退場し、延と交替して『明暗』を結末へと導かなければならない。予測すれば、東京からの電報によって呼び戻された清子と、生涯に一度の勇気を出して温泉場への汽車に乗った延とが、軽便と汽車の乗り換えの停車場ですれ違おう。清子と結婚するはずであった津田は、なぜか延と結婚することになった。その交替劇を津田はもう一度反復する。滝の散歩から帰った津田は、温泉場の玄関に清子ではなく延の後姿を発見することになるだろう。

反動の原理にそくして言いかえれば、ほとんどの場合の突然は実は反動であった。反動とは外部から

見ると突然であるが内部では次第漸次の変化が起きている意識推移である。清子の例が内部からも外部からも描きようのない突然の心変わりとして書かれているとすれば、延の場合には、内部と外部のずれによって反動の様相を明らかに描くことができる。そして、その反動の様相を凝視し認識しなければならないのは、内面をもった近代人としての延と津田自身である。自由間接話法にそくして後述するように、読者は延あるいは津田に伴走して、それを成就させる役割が期待されている。

津田もまた延と同様に豊かな内面を備えた人物として登場している。「吉川の細君などが何うしても子供扱ひにする事の出来ない自己を裕に有つてみた」(12-37)とあり、延とともに自由間接話法によって内的独白が多く表出される人物である。

『明暗』冒頭で、津田は身体の急変から精神へ言及する。「精神界も全く同じ事だ。何時どう変わるかわからない。さうして其変る所を己は見ただ」(2:7)と津田はいう。さらに、友人からポアンカレーの偶然説を聞かされた津田は、それを自分に当て嵌めてみるが、納得はいかない。次に引用するのは、津田の内面を自由間接話法で述べた例である。

すると暗い不可思議な力が右に行くべき彼を左に押し遣つたり、前に進むべき彼を後ろに引き戻したりするやうに思へた。しかも彼はついで今迄自分の行動に就いて他から牽制を受けた覚がなかつた。為る事はみんな自分の力であつた。言ふ事は悉く自分の力で言つたに相違なかつた。

「何うして彼の女は彼所へ嫁に行つたのだらう。それは自分で行かうと思つたから行つたに違ない。然し何うしても彼所へ嫁に行く筈ではなかつたのに。さうして此己は又何うして彼の女と結婚したのだらう。それも己が貫はうと思つたからこそ結婚が成立したに違ない。然し己は未だ嘗て彼の女を貫はうとは思つてゐなかつたのに。偶然？ポアンカレーの所謂複雑の極致？何だか解らない」(2-8)

津田は複雑すぎて科学的には分からないことを偶然と名づけるというポアンカレーの偶然説に納得していない<sup>10</sup>。『文学論』におけるジェームズの心理学説やスターバックの脳生理学説が漱石を納得させ



なかったように、ポアンカレーも津田を納得させていない。

清子はなぜ関と結婚したのか、清子が行こうと考えたからに違いない、同じように、津田はなぜ延と結婚したのか、津田がしようと考えたからに違いないという反復は、清子と同じ問題を津田もかかえていることを示している。清子に尋ねる前に津田は自分自身にそれを尋ねなければならない。いまだかつて延を貰おうとは思っていなかったのに現に今こうして延と結婚している。そして誰も自分の行動を牽制したことはないのだから、それは自分の意志であるに違いない<sup>11</sup>。こうして、清子に問い質そうとした問題は、なぜ延と結婚することになったかという津田自身の問題であることが判明する。

津田は一つ一つは自分の意志の力で行ったに違いないのに、思いもかけなかった延との結婚に至り着いていることを、不思議な思いで眺めていた。大風に吹き倒された宗助と米が、罪悪感よりも先にその不可思議さに茫然としたのと同じことである。その一つ一つの過程・順序は反動の意識推移として理解できるが、至り着いた先は思いもかけなかった延である。

津田はなぜ清子と結婚せずに延と結婚することになったのか。そこにはどのような法則が働いているのか。漱石はずっとこの法則にそくして書いて来た。つまり、些細なきっかけがあれば隣り合った二人は交代するという原則である。従来ジラールの欲望の模倣論にもとづいた三角関係が繰り返し論ぜられてきたが(作田 1981)(飯田 1998)、隣人の欲望を模倣すると考える必要はなく、隣人との交替可能性こそが近代社会の本質的条件ではないか。あるいはもっと一般的に、群れの中で生きる生物の条件であるかもしれない<sup>12</sup>。

この交替可能性を漱石の主人公たちはさまざまに変奏する。たとえば、恋人を友人に周旋したり(『それから』)、友人の妻を奪ったり(『門』)、妻を弟に譲ろうとしたりする(『行人』)。これらはすべて隣人との交替可能性を語っている。このとき、意識推移の原則における過程・順序が重要であったように、女性を知った先後関係とわずかな時間差が常に問題になる。『行人』では、二郎が一郎より先に直を知っていたことが葛藤の原因である。『それから』の代助も『こゝろ』の先生も、親しい友人に告白の先を越されてしまったことが原因となって葛藤が生じて

いる。そしてじつのところそれ以外の原因はないと言ってよいのである。

『明暗』における清子の役割は、突然の心変わりによって近代社会の成立条件としての交替可能性すなわち偶然性を示すことである。一方、延の役割は、意志と努力によって漸次の変化を引き起こし、交替可能性の中に必然性を見いだすことである。清子は突然の心変わりについて何一つ説明することができないまま登場し、退場する。書くことができるのは延における反動=反作用の詳細であり、たくさんの可能性の中から必然性を作り出して行く人間の自由な行為の詳細である。そのための手法が自由間接話法とのちに呼ばれることになるオースティンの手法である。

#### IV. 『高慢と偏見』付自由間接話法

オースティンと則天去私を関係づけて論じた従来の研究では、則天去私についてさまざまな解釈が試みられている。岡(1916)によるシェークスピアと並ぶ「私のない小説」という解釈、松岡(1934)による「自然随順」や「自然法爾」に類する宗教的な境地という解釈、あるいは、江藤(1956)による「作家の作中人物に対する fairness あるいは pity」という解釈。また、オースティンの話法の特徴である自由間接話法に注意して『明暗』との関係を検討するものに、佐藤和代(1995)、鎌田(2003)などがある。

本論では、反動と突然の意識推移の法則から、『高慢と偏見』を同じように解釈することができるかどうか考察を加えていきたい。以下は漱石がオースティンをどのように読んだかという視点からの考察であり、オースティン研究史における作品解釈とはいささかの隔たりがあることに注意されたい。

『高慢と偏見』は、*First Impression* (『第一印象』)という題名で1796年に書きはじめられ、改題されて1813年に出版された。漱石文庫には1899年版が収蔵されている<sup>13</sup>。はじめの悪い第一印象が、いつしか変化して幸福な結婚へ至るといふ小説である。

ダービシア州ペムバリーの領主ダーシーは、ハーフォードシア州ロングボーン村に住むベネット家の姉妹と近づきになる。ロングボーンの隣にあるネザーフィールドの屋敷を借りたビングリーとダーシーが無二の親友だったことからである。舞踏会でベネット家の次女エリザベスを紹介されたダーシー

は、「がまんはできるけど、僕が誘惑されるほどの美人じゃないね」(3-3)と言ってエリザベスを無視しようとした。エリザベスは面白がって友だちの間にその話を触れまわって歩いた。二人の第一印象はたがいにきわめて悪かった。また、ベネット家ではダーシーは財産はあるが高慢で不愉快な紳士であると評判され、一方、ネザーフィールドの屋敷ではエリザベスをはじめベネット家の人々が嘲笑された。

姉のジェーンはビングリーに気に入られて交際がはじまり、ネザーフィールドでエリザベスとダーシーもしばしば会うことになった。6章には次のような一節がある。

エリザベスは、ビングリー氏の姉に対する愛情を観察することばかりに夢中になっていた。自分が彼の友のダーシーの興味の対象になってきているということは、てんで考えてもみなかった。ダーシー氏は、最初は彼女をきれいだとは思わなかった。(中略)すぐ後で、彼女の黒い眼のうつくしい表情が顔全体をなみなみならず聡明に見せていることに、彼は気づきはじめていた。これにつづいて続々と、同じように当惑させられることが発見された。(中略)彼は、彼女の作法は上流社会のものではないと主張したけれど、その軽快で剽軽な風には心をひかれた。彼女はそれには全然気がつかなかった。(6-40)

ダーシーのエリザベスへの求婚事件が起こる30章から34章をターニングポイントとして、『高慢と偏見』は前半と後半に分けて考えることができる<sup>14)</sup>。

前半でのエリザベスは、ダーシーの気持ちにまったく気づくことができず、不愉快で意地の悪い最悪の男という偏見を固めていく。一方、ダーシーは当惑しながらエリザベスへの想いを深めていく。ダーシーは恋心が昂進するにつれて、それに対する警戒と抑制を心がける。社会的地位がベネット家とは格段に違うからである。たとえば、ジェーンが風邪を引いてビングリー邸に滞在せざるをえなくなったとき、エリザベスは三マイルの道を泥だらけになって歩いて来た。「ダーシー氏は、運動のため上気した彼女のうつくしさに心をうたれる一方、一人でこんなに遠くまで歩いてくる何かちゃんとした理由があるのだろうか」という疑惑にも、半分心をうばわれて

いた」(7-56)とあるように、それが結婚相手をつかまえようとする狡猾な手段ではないかと疑っている。ジェーンに風邪をひかせてビングリー邸に滞在させようとしたベネット夫人の狡猾がこの疑惑の裏にはある。

ダーシーの恋心は、エリザベスには気づかれないが読者にははっきりと開示されている。

ダーシーは、こんなに自分の心を迷わした女ははじめてだ、と思った。彼は、もしこの人の親類関係がわるくないとすると、自分ほとんどもないことになっていたにちがいないと思った。(10-86)

こうした経緯があって、ダーシーは今はいくらかでも彼女をちやほやするような気ぶりを見せないようにして、姉妹がビングリー邸を去る日にも口もきかないように気をつけた(12-98)。エリザベスがダーシーの気持ちに気づけないことには、まずダーシーのこのような用心がある。そして、第一印象で形成されたダーシーへの偏見がエリザベスの目を曇らせているということがある。さらに、ダーシーの心の中が自由間接話法によって自在に語られることによって、読者と語り手(作者)だけが共有しているダーシーの心の内側の情報と、外側からダーシーを見るほかないエリザベスのそれとの落差が生じる。オースティンの自由間接話法は、この描写の落差をつくるためにあると言って過言ではない。オースティンは読者にどのような情報をどれくらい開示するかを的確に制御している。

たとえば、ピアノの傍にいるエリザベスはダーシーがしばしば自分を見ていることに気づくが、なぜかがどうしても分からず、とうとう「自分には、ここにいる誰よりもまちがった捨てておけないような点があるので、それで彼の注意をひくのであろうと想像できたのであった」(10-85)と考える。ここには、エリザベスがダーシーの内面をまったく読み間違えていることが示されている。ダーシーの恋心をエリザベスには隠しておくことが重要な仕掛けである。読者は、ダーシーの次第次第につる恋心と、逆にいよいよ抑制される分別との戦いに感情移入し、とうとう恋心が勝ちを占めてエリザベスに求婚する場面がいつ来るか今来るかと待ち望む。読者の強い期待が『高慢と偏見』のクライマックスを作

り出すのである。

その結果、エリザベスにとっては晴天の霹靂、ダーシーにとっては熟考の末の決壊として、34章の求婚事件が起こる。突然でありながら漸次である反動の恋がこうして小説の中で実現する。エリザベスはダーシーの心にまったく気がつかないのに、読者はダーシーの心の動きを手取るように知っている。突然はエリザベスの感覚であり、漸次はダーシーのそれであるが、読者だけがそれを同時に受け取ることができる。

『明暗』で見たように、反動=反作用の感覚は、後からも先からも捉えることができず、それに気がついた途端に別のものになってしまうものだった。パースの用語で言えば、反作用は第二性であり、気づいた途端に第三性へと移行する。パースは、「反作用の感覚は、それが関係する憂鬱と激怒との二つの感情が現存するときを除き、存在しえない」（パース 1982: 211）と言っていた。つまり、通常ではこの反作用の感覚をそれと指し示すことはできない。オースティンの小説は、自由間接語法を用いることによって読者の体験の中でそれを実現している。これが漱石の学んだオースティンの技法である。

自由間接語法についてここで注意しておく、徳沢（1964）、中川（1983）、佐藤和代（1995）によれば、自由間接語法はドイツでは体験語法と呼ばれて19世紀末に研究が着手され、1912年のCharles Ballyの命名によって広く知られるようになった。オースティンはもとより漱石も自由間接語法という名称と研究成果を知らなかった可能性が高いという。従って、漱石はオースティンの小説そのものからこの技法を学んだものと推測される。

中川ゆきこが述べたように、自由間接語法の本質は模倣である。中川はピエール・ギローにもとづいて、言語には二重の機能があり、「語られる対象を客観的に指示する機能と、語り手が自分の語る対象についてもつ感情を表現する機能である」として、直接語法、間接語法、自由間接語法は、この二つの機能の間に成立する三種の関係であるという。そして、ギローによれば、「もっともよくみかける自由間接語法は、第二の語り手の語ったことを間接形式ながらその話者独特の語彙をとりいれて伝達したものである」という（中川 1983: 30-36）。

つまり、自由間接語法とは、そこにいない誰かの発言を、話者の理解と判断にもとづいて模倣・再現

するときの技法の一つである。この模倣・再現は、話者の理解と判断にもとづいてなされる限り、そのままの模倣・再現ではありえず、より積極的な自由間接語法の意義とは、他者と話者の二つの考えを調停し、結合することにほかならない。そして、自由間接語法の語りが二つの考えを調停するものであるなら、そこに伴走している読者もまたその調停に参加すると考えるべきではないか<sup>15</sup>。オースティンの小説は読者によって大きく解釈が変動するようであり、日本語訳にも変動が大きい。それは、自由間接語法が読者の解釈を必要とする語法であり、読者の参加度が高いためであると考えられる。読者はその力量に従って、出来事がどういう意味をもち、どうあるべきかという解釈の形成に参加する。

さて、34章の求婚事件のあと、エリザベスはダーシーから手紙を受け取り、偏見と誤解をじょじょに解いていく。後半ではエリザベスの内面の独白が自由間接語法によって詳しく語られ、読者はこんどはエリザベスに伴走してその想いが成長していく過程に共感する。ダーシーはエリザベスに拒絶されたあと、ペムバリーの屋敷でエリザベスと再会するが、その後の行動はストーリーの表面から隠されてしまう。ダーシーの心がエリザベスには見通せないのも、もう一度求婚されるかどうか、はらはらしながら読者はエリザベスとともにそれを待ち望む。ここでも、漸次と突然との幸福な一致は、読者の期待によって成就する。

たとえば、次に引用するのは、自由間接語法によってエリザベスの心の中が語られる例である。

ダーシーは部屋の別の方へ行っていた。彼女は眼で彼のあとを追い、彼が人に話しかけるごとに、その人を羨ましいと思い、自分はもうコーヒーを人にすすめるどころではなくなり、そしてまた、そういう自分の愚かさかげんに無性に腹をたてていた！

「一旦拒絶した人ではないか！ その人の愛の復活を期待するなんて、それまで馬鹿になればたくさんだわ！ 同じ女に二度の申しこみをするなんて、そんな弱気に抗議しないような人が、男の中に一人でもいるかしら？ 男の気持ちとしたら、これほどいやな侮辱はないんだもの！」（54-198）

このように、『高慢と偏見』は、外面と内面の落差が最大限の効果をあげるように構成されている。それによって男にも女にも等分に内面をもった自由と独立の可能性が与えられる<sup>16</sup>。近代的個人は、近傍の身近な人々の間で、紳士淑女のマナー<sup>17</sup>に照らして笑うべきことと大切にすべきことを区別する内面の過程を発見することによって成立したと考えられる。

30章から34章の求婚事件では、ダーシーとエリザベスはもっとも接近しながら、その内面の落差は最大となる。その様相を以下で確認しておきたい。

エリザベスは、コリンズと結婚してケント州ハンスフォードに住むシャーロットの元に滞在している。隣接するローズィングスのキャサリン・ダ・バーグ夫人の元に、二人の紳士が到着して交際がはじまる。

二人の紳士とはダーシーとその従兄にあたるフィッツウィリアム大佐である。この二人のうち、どちらが本物の紳士であるかという命題は見過ごされてよい問題ではない。大佐は申し分ないマナーで社交を楽しむ。しかし、33章で大佐は「下のほうの息子は、好きな人と結婚できません」と告げ、エリザベスは「『わたしのことを言ったのかしら?』そう考えると、顔があかくなった」(33-290)と、その意味を理解している。あるいは、「金に頓着しないで結婚するよゆうのあるものはたくさんはいません」と大佐は言い、エリザベスはその意味を「大佐は、自分はそういうつもりはないと言明していた」(34-297)と了解している。すなわち、大佐は一目でエリザベスを気に入り求婚したいと考えたが、財産がないために断念したという水面下の求婚事件があった。これが奇数章に隠された、もう一つの求婚事件である。

ダーシーは二人の意気投合した様子を見て、「すぐにくいども好奇の眼を二人の方にむけた」(31-272)とあり、足繁く牧師館にやってきて交際を楽しむ大佐のかたわらで、ダーシーはなぜそんなにたびたび牧師館にくるのか分からないと人々に思われながら黙って腰かけているばかりである。エリザベスの散歩道にくいども姿をあらわしては、妙なとりとめのないことを尋ねるので、意地悪をされているようにさえ思う。これらは大佐との競争に迫られたダーシーがついに求婚に至るまでの逡巡である。つまり、偶数章のダーシーの求婚は、奇数章の大佐の求婚と競争関係にある<sup>18</sup>。

では、エリザベスはなぜダーシーの求婚を拒絶したのだろうか。34章でエリザベスは、ダーシーが紳士らしい態度で求婚したら承諾されただろうと考えるなら大間違いだと述べて、姉の結婚を邪魔し、ウィカムの財産を取りあげたことを語る。しかし、この二つの理由はいずれ取り除くことができる誤解であるにすぎない。紳士らしさを欠いたダーシーの態度こそが根本の問題である。

では、エリザベスはいつどのようにしてダーシーが紳士ではないと判断したのだろうか。それを考えるための恰好の場面は、34章の求婚に先立つ32章である。わずか数行の会話の中に、すべての葛藤が書き込まれている。

ダーシー氏は自分の椅子を、すこし彼女の方へひきよせて、言った。「あなたは、それほど強く土地に執着なさる権利はありません。あなただってしじゅうロングボーンにいたはずはないんですから。」

エリザベスはびっくりした顔つきをした。ダーシー氏は、なんだか自分の気持が変わったのを感じた。椅子をうしろへひいて、卓から新聞をとりあげると、ざっと眼を通しながら、今までより冷淡な声で言った――

「ケントはお気に入りましたか?」(32-283-284)

Mr. Darcy drew his chair a little towards her, and said, "You cannot have a right to such very strong local attachment. You cannot have been always at Longbourn."

Elizabeth looked surprised. The gentleman experienced some change of feeling; he drew back his chair, took a newspaper from the table, and glancing over it, said, in a colder voice:

"Are you pleased with Kent?" (32-165-166)

この会話の前には、結婚して実家から50マイル離れたハンスフォードに住むことになったシャーロットにとって50マイルが近いか遠いかということが議論されているので、Youの強調は、生活の安定のためにコリンズの求婚を承諾したシャーロットと同様にという意味に違いない。あなただってシャーロットと同様に実家であるロングボーンにそんなに強く執着する権利はない、なぜなら、それを

相続する権利があなたにはないから。これまでだってロングボーンにずっと住み続ける権利をもっていたわけではないし、これからはなおさら、結婚してどんなに遠くても否応なく実家から離れなければならないのがあなたの立場であるから<sup>19</sup>。ダーシーの言葉には、このような言外の意味が隠されている。

エリザベスは驚いた様子を見せた。日本語訳の中には、ダーシーの結婚の申し込みだと理解して驚いたと解釈しているものがいくつかあるが、それでは34章の求婚に対するエリザベスの驚嘆が薄まってしまう。さらに、女性が結婚の話題を振られたときには顔を赤らめたと書くのがオースティンの通例である。コリンズの求婚のときも、大佐の場合にも、エリザベスは例外なく顔を赤らめている。とすればエリザベスの驚きの理由は、ダーシーの言葉が、あの失礼なコリンズとまったく同じだということ以外ではない。ダーシーの求婚が拒絶される準備はこうして整えられた。

「相当の財産をもっている独身の男なら、きっと奥さんをほしがっているにちがいない」(1-9)という『高慢と偏見』の冒頭に置かれた箴言が女性のよって立つ高慢と偏見であるなら、相当の財産をもっていない独身の女性は、きっと財産のある男性の求婚を望んでいるにちがいないと信じて疑わないのが男性の高慢と偏見である<sup>20</sup>。32章の会話は、ダーシーとエリザベスの間に生じる落差の最大値を示している。

## V. 『ウェイクフィールドの牧師』

ウェイクフィールドの美しい田舎で、プリムローズ牧師夫妻は六人の子どもたちに囲まれて、つつましく満ち足りた生活をしていた。ところが、一家は運命に弄ばれるように次から次へと不幸な事件に巻き込まれ、なけなしの財産を失うことをはじめとしてどんどん貧しくなり、故郷を失い、子どもたちは家を出て流浪する。牧師はどうとう地代が払えずに監獄に入ることになり、息子の一人も悪徳地主のソーンヒル一味と決闘して収監される。ところが、全32章のうち第30章になると、水戸黄門のような救世主が登場してすべての不都合がばたばたと解決し、一家は幸福な結末を迎える。古くからの友人バーチェル氏とは、サーの称号をもつウィリアム・ソーンヒル閣下であり、すべての裁定ののち、牧師の末

娘ソフィアと幸福な結婚をする。閣下は地位や財産に惑わされない妻をもとめて身をやつしていたのである。同時に、長男ジョージはウィルモット嬢と結ばれ、長女オリヴィアは地主ソーンヒルとの結婚が正式なものであったことを知る。

オースティンはゴールドスミスを高く買っていたようだ。『エマ』では、誠実な人柄の登場人物の愛読書として『ウェイクフィールドの牧師』が挙げられている。そして、上記のあらすじに見られるように、『高慢と偏見』は『ウェイクフィールドの牧師』をよく換骨奪胎している。すなわち、長く続いた一家の不幸な事件を通してソフィアはバーチェル氏への愛を育てた。ジョージは財産のあるウィルモット嬢との結婚を一旦はあきらめ、長い放浪ののち、無一文になった彼女に再会して求婚することでその真心を証明する<sup>21</sup>。漸次に育てた愛情が、あるとき一挙に結実するという意味で、『高慢と偏見』の先駆けとなっている。また、オリヴィアが駆落し、ソフィアが誘拐され、さまざまな出来事ののちめでたく三組の結婚が成就する構成も等しく、小野寺健の解題(ゴールドスミス:344)にあるようにプリムローズ牧師夫妻がベネット夫妻の原型になっていることも見て取れる。

30章で突如サー・ウィリアムとして再登場するバーチェル氏、そして偶然通りかかって監獄にいるジョージと再会するウィルモット嬢というように、この小説は、偶然を一つの恩寵として、すべての悪しき出来事を善きものへと反転させる。長く続く不幸な出来事に対して心正しく希望を失わずに努め続けることによって、はじめて恩寵は訪れる。牧師がたゆまず説く心正しい行いに対して、不意に何の理由もなく与えられるものが恩寵である。これこそが漱石のいう反動(漸次=突然)であり、パースのいう反作用(自発=偶然)である。

『高慢と偏見』の緊密な構成の評価に対して、『ウェイクフィールドの牧師』の評価は低い。たとえば、依藤(2006)は、「構想や技法にも拙いところが目立っている、筋(プロット)が弱い。また、明らかに起こりそうもない偶然が次々と生じて、物語を先へとつないだりする」と言い、また、「サミュエル・ジョンソンは、出版人に売り込んでやったにもかかわらず、現実性に欠ける単なる奇抜な作品として、これを高く評価しなかった。アメリカのマーク・トウェインに至っては、これを厳しく批判している」

という。一方、この作品を高く評価したのはゲーテやスコット<sup>22</sup>であると依藤は紹介して、慈悲や公平、寛大や平静、善良や誠実などの特質を挙げているが、近代人は、結局のところこの作品の不合理・不自然をもうすでに理解できなくなっているのではないか。その理解できない核心部分に偶然性がある。

プリムローズ牧師は、この不意にやってくる偶然について次のように述べている。

それに私は、こういう偶然の出会いということについて考察せずに、話を進めることはできない。そんなことは日常茶飯事なのかもしれないが、よほどとくべつな場合を別にすれば、驚かされることはそれほどないからである。人生の歓びや幸運には、どれをとっても、信じられない偶然のおかげの場合がじつに多いのだ。われわれが着るものにも食べるものにも不自由しないですんでいるのは、じつに多くの、一見偶然と見ることが結びついたおかげなのだ。農民は働き、雨が降り、風も吹いて商船の帆をふくらませてくれるのでなければ、日常の必需品にも不自由する人が続出するだろう。(31-313)

相沢(1974)は、この牧師の言葉には漱石の則天去私の思想が窺えると述べ、神の恩寵としての偶然という解釈をしている。そして、あらゆる出来事の背後にさまざまな姿をした恩寵に溢れる神が存在するという認識がゴールドスミスにはあるという。しかし、漱石にも晩年の漱石をもっともよく理解したと思われる芥川龍之介にも絶対神は不在である。漱石にそくして考えるなら、この偶然は、もっとアルカイックな起源をもっているのではないか。そして、『高慢と偏見』は、『ウェイクフィールドの牧師』が保持しているアルカイックな偶然の感覚をよく継承している。漱石が二つの作品を並べて示したことの中心に、この不合理・不自然な偶然がある<sup>23</sup>。漱石がこうした偶然の感覚を方法的に考察したことは佐藤(2012, 2013)にその一端を述べたが、占いやお告げ、懸賞や富くじなどにかすかに伝わるこのアルカイックな偶然については、あらためて考察が必要だろう。

## VI. おわりに

漱石の『文学論』の根本原理である暗示の法則の中心に働いているのが漸次と突然を一致させる反動の原理であった。本論は、漱石の根本にはチャールズ・サンダース・パースの哲学があることを前提として、パースと漱石に共通する反作用=反動の原理によって自己本位と則天去私という一対の概念を説明しようとするものである。それによって、受動的(偶然)でありながら同時に能動的(自発)である人間の自由な自己本位がまず肯定されるとともに、則天去私との一対性が成就する。漱石は、パースによる偶然と自発の一般理論を、漸次と突然という時間の様相によって考えている。この突然と漸次が出会う反作用=反動の原理によって、『明暗』、『高慢と偏見』、『ウェイクフィールドの牧師』を等しく解釈できるとすれば、この仮説には妥当性があるという結論が得られるだろう。

『明暗』における漸次と突然は延と清子に書き分けられ、津田は暗示にかけられたようにして清子のいる温泉場への道を辿るが、清子本人も見ていた津田も聞いている読者も、その突然の心変わりを説明することができない。解くべき問題は津田自身と延との関係にあることに気づくことによって『明暗』は結末へと収束していくだろう。

『高慢と偏見』は、同じく突然と漸次とが一致する反動の原理によってストーリーが緊密に構成されていた。自由間接語法によって作り出される死角によって、ダーシーの愛情にまったく気づくことのできないエリザベスと、エリザベスへの愛を漸次育てていくダーシーとが幸福な一致を果たすというストーリーが、反動の原理を体現していた。

『ウェイクフィールドの牧師』の場合には、次々に降りかかる不幸な出来事が、現代のわれわれには不自然にしか見えない偶然によってすべて好転して幸福な結末が約束された。漸次に働く自発的な努力に支えられた信仰心と、恩寵のように突然何の理由もなく降ってくる偶然とが、反動の原理によって一致する。オースティンとゴールドスミス、そして漱石には、このような偶然がアルカイックな恩寵として見えていたと思われる。

## 注

- 1 則天去私の研究史については、相原（1977）、石崎（1977）、大山（2013）を参照した。
- 2 石崎（1977）によれば、漱石自筆の則天去私の文字があるが、それに付された解説の文が漱石自身の言説かどうかは不明であるという。
- 3 以下の漱石作品の引用は、夏目金之助（1993-2004）により、巻数とページを以下のように略記する。16巻595頁=16: 595。ただし『明暗』については、巻数を省略し、章と頁を次のように略記する。11巻13章39頁=13-39。
- 4 漱石は「私の個人主義」（1914）で『文学論』の詳しい成立事情を述べ、「失敗の亡骸」「畸形児の亡骸」「未成市街の廢墟」（16: 596）と評した。
- 5 相原（1977）が指摘しているように、駒尺（1969）と伊豆（1970）は、自己本位と則天去私を一对の概念として肯定的に論じている。
- 6 たとえば、石崎（1977）は、オースティンとゴールドスミスのこの二つの作品がかけ離れていると評している。
- 7 本稿作成後、C・S・パースの真理の収束説について、目標値があらかじめ知られていない場合の収束値と、目標にあらかじめ旗の立っている場合の極限値とを区別している石田（2012）に気づいた。前者が突然、後者が漸次に対応するのではないかと思われる。
- 8 平石（1991）は、漱石文庫に収蔵されているAlberta von PuttkamerによるGabriele D'Annunzio（1904）に、ダスンツィオが部屋を緑と赤に塗り分けたという挿話が記されていることを紹介しているが、『それから』の本文には青と赤に塗り分けたとあり、齟齬がある。
- 9 助川（1983）、重松（1979）、石原（2004）。
- 10 パースは、「必然論批判」（1892）で、「もっと深く反省すれば、偶然とは、われわれにとって未知なる原因を表わす名称にすぎないことが、きみにも分かってくるだろうよ。」という発言に反論して、偶然がその中にあるところの多様性は、不変の法則によるものではありえないと述べている（パース 1982: 240）。
- 11 津田の温泉場行きは、「琴のそら音」と同様に、吉川夫人の暗示によると考えられる。津田は夢遊病者のように暗い旅路を温泉場へと辿り、暗示から覚めることによって、解くべき問題（延）に向かい合うという構造を『明暗』はもっている。
- 12 郡司（2013）は、ムクドリやカニの群れのシミュレーションによって、群れの意識をバーチャルに検証している。
- 13 以下のオースティンの日本語の引用は富田（1994）により、章と頁数を次のように略記する。6章40頁=6-40。英文は、参考文献に示した1899年版の影印資料により、章と頁を同様に略記する。日本語訳と1899年版は、ともに全61章に仕立て直されている。
- 14 武藤（2010）は、最近のオースティン研究を踏まえつつ、ダーシーの求婚を境にして前半と後半に分けて話法の違いを考察している。
- 15 中村（2013）は、山口（2009）を参照して、自由間接話法は、読者に高度の解釈を要求すると述べている。
- 16 『高慢と偏見』における男女の対等な関係は、漱石の『道草』における「いくら女だつて、さう踏み付けられて堪るものか」、「女だから馬鹿にするのではない。馬鹿だから馬鹿にするのだ。尊敬されたければ尊敬される丈の人格を拵えるが、い、」（10: 216）という対話によくあらわれているだろう。
- 17 「紳士」概念の衝突——地位身分としての紳士と人格としての紳士——については、川本（1984）、Clark（1962）による。
- 18 ダーシーと大佐の競争は、『こゝろ』における先生とKとの関係に引き写されたと考えられる。
- 19 ここには、コリンズがエリザベスに拒絶されたあと、シャーロットと結婚したことによって、エリザベスがロングボーンに住み続ける可能性を失ったことが踏まえられているだろう。キャサリン・ダ・バーク夫人は、エリザベスに向かって「『あなたのお父さまの土地は、コリンズ氏が相続することになっているはずですね？ あなたのためには、』そう言って、シャーロットの方をむいて、『けっこうだと思いますわ。（下略）』（29-260）と述べて、ロングボーンの帰趨を明示している。
- 20 ダーシーは、「あなたがわたしの言い寄るのを希望し期待していると信じていたのです」（58- 245）と述懐している。ダーシーは、エリザベスの驚きの表情を、結婚を望んでいると読み違えて、求婚の気持ちが後退したのである。
- 21 ここには、いったん去ってしまったピングリーへの愛を貫き通したジェイン、コリンズとダーシーの求婚を拒むことによって、ロングボーン、そしてペムバリーの所有権を放棄したエリザベスとの対応があるだろう。
- 22 『ゲーテとの対話』の中でゲーテはゴールドスミスを高く評価し、また、スコットはその評伝を著している。
- 23 大久保（1975）が指摘しているように、漱石は『ウェ

イクフィールドの牧師』について、「骨組だけを拾い出すとやはり不自然な構造が残ります。然し私はその不自然ささへナイヴな美点として認める位好きなのです」(16: 575)と述べている。

## 参考文献

- 相原和邦. 1977. 「『明暗』と則天去私」, 『有斐閣双書近代文学4 大正文学の諸相』, 有斐閣. = 1980. 『漱石文学 その表現と思想』, 塙書房. pp. 262-277.
- 相沢興一. 1974. 「The Vicar of Wakefieldについて——『則天去私』の文学」, 『研究紀要』, 21号, 3月. 長崎県立女子短期大学.
- Austen, Jane 1899. *Pride and prejudice* Macmillan's illustrated standard novels.  
= <http://catalog.hathitrust.org/Record/004131267>
- オースティン, ジェーン. 富田彬訳. 1994=1996-1998. 『高慢と偏見』上下. 岩波書店.
- Clark, G. Kitson. 1962=1985. *The Making of Victorian England*, J. W. Arrowsmith Ltd, Bristol. pp.206-274.
- 海老池俊治. 1977. 「メレディスとオースティン」, 『漱石における東と西』, 主婦の友社. pp.159-166.
- エッカーマン, ヨーハン・ベーター. 1969=1993. 『ゲーテとの対話』上中下, 岩波書店.=
- Eckermann, J.P. 1836-1848. *Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens*. Brockhaus.; Leipzig.
- 江藤淳. 1955-1956. 「夏目漱石論」, 『三田文学』, 第2期45巻, 11月, 12月, 第2期46巻, 7月, 8月, 三田文学会. =1956=1974=1979. 『決定版夏目漱石』, 新潮社. pp.11-19.
- ゴールドスミス, オリバー 小野寺健訳. 2012. 『ウェイクフィールドの牧師——むだばなし』, 岩波書店.= Goldsmith, Oliver. 1766=1982. *The Vicar of Wakefield*, Penguin Classics; Reprint: London.
- 郡司ベギオ-幸夫. 2013. 『群れは意識をもつ 個の自由と集団の秩序』, PHP研究所.
- 蓮實重彦. 2007. 『「赤」の誘惑——フィクション論評』, 新潮社.
- 平石典子. 1991. 「感覚の饗宴——ガブリエーレ・ダンヌンツィオと日本の世紀末」, 『比較文学研究』, 第60号. 恒文社.
- 飯田祐子. 1998=2004. 『彼らの物語 日本近代文学とジェンダー』, 名古屋大学出版会.
- 石田正人. 2012. 「C・S・パースの真理の収束説」, 『科学哲学』, Vol. 45. No.1. 日本科学哲学会.
- 石原千秋. 2004. 『漱石と三人の読者』, 講談社. pp.158-194.
- 石崎等. 1977. 「漱石と〈則天去私〉」, 『跡見学園短期大学紀要』, 14巻. 跡見学園大学女子短期大学部.
- 伊豆利彦. 1970. 「漱石における『則天去私』と『自己本位』」, 『国文学解釈と鑑賞』, 35巻11号, 11月. 至文堂.
- 川本静子. 1984. 『ジェイン・オースティンと娘たち』, 研究社. pp.13-38.
- 鎌田京子. 2003. 「Jane Austen文学における『則天去私』の視点」, 『仏教大学大学院紀要』, 第31号, 3月. 仏教大学大学院.
- 駒尺喜美. 1969. 「『則天去私』覚え書」, 『日本文学』, 18巻1号, 1月. 日本文学協会. =駒尺喜美. 1970. 『漱石 その自己本位と連帯と』, 八木書店. pp.164-202.
- 久米正雄. 1916. 「生活と芸術と(日記から)」, 『文章倶楽部』, 第1年8号, 12月. 新潮社. =1922. 『人間雑話』, 金星堂. pp. 282-289.
- 松岡譲. 1933. 「漱石山房の一夜——教問問答」, 『現代仏教』, 92巻100号, 1月, 大雄閣. =1934=1986, 『漱石先生』, 岩波書店. pp.206-218.
- 松浦嘉一. 1922. 「漱石先生とメレディスとオースティン」, 『新青年』, 第27巻4号, 4月. =平岡敏夫編. 1991. 『夏目漱石研究資料集成』, 第5巻. pp. 3-9.
- 武藤哲郎. 2010. 「『評価の不透明性』と自由間接話法: 『自負と偏見』におけるオースティンの語りの技法」, 『大妻女子大学紀要・文系』, Vol.42, 3月. 大妻女子大学.
- 中川ゆきこ. 1983. 『自由間接話法——英語の小説にみる形態と機能』, アポロン社.
- 中村三春. 2013. 「虚構論と文体論——近代小説における自由間接話法」, 『国語と国文学』, 90巻11号, 11月. 明治書院.
- 夏目金之助. 1993-2004. 『漱石全集』, 全28巻. 岩波書店.
- 岡栄一郎. 1916. 「夏目先生の追憶」, 『大阪朝日新聞』, 12月20日~25日. =平岡敏夫編. 1991. 『夏目漱石研究資料集成』, 第2巻. pp.393-402.
- 大久保純一郎. 1975. 「漱石の則天去私と*The Vicar of Wakefield*」, 『英語青年』, 121巻6号, 9月. 研究社出版.
- 大山英樹. 2013. 「『漱石神話』の生成とその影響: 小宮豊隆『夏目漱石』を中心に」, 『青山総合文化政策学』, 5巻1号, 3月. 青山学院大学.
- パース, チャールズ・サンダース. 浅輪幸夫訳. 1982. 『偶然・愛・論理』, 三一書房. = Peirce, Charles Sanders.



1956. *Chance, Love, and Logic* George Braziller, Inc., New York.
- Peirce, C. S. 1891. "The Architecture of Theories", *The Monist*, Oct. Vol.1. No.2.  
= <http://archive.org/details/monist17instgoog>
- Peirce, C. S. 1892. "The Doctrine of Necessity Examined", *The Monist*, Apr. Vol.2. No.3.  
= <http://archive.org/details/monist15instgoog>
- Peirce, C. S. 1892. "The Law of Mind", *The Monist*, Jul. Vol.2. No.4.  
= <http://archive.org/details/monist15instgoog>
- 作田啓一. 1981=1987. 『個人主義の運命——近代小説と社会学』, 岩波書店.
- 佐藤和代. 1995. 「漱石とジェイン・オースティン——自由間接話法をめぐって」, 『人文学研究』, 第88輯, 新潟大学.
- 佐藤深雪. 2012. 「偶然の記号論的分析——夏目漱石の後期作品——」, 『広島国際研究』, 第18巻, 11月. 広島市立大学国際学部.
- 佐藤深雪. 2013. 「偶然の構造——チャールズ・サンダース・パースと夏目漱石」, 『比較日本文化研究』, 第16号, 12月. 比較日本文化研究会.
- 佐藤深雪. 2014. 「夏目漱石とチャールズ・サンダース・パース——暗示の法則とは何か」 『JunCture 超域的日本文化研究』, 05号, 3月. 名古屋大学大学院文学研究科附属「アジアの中の日本文化」研究センター.
- Scott, walter. 2012. *The Miscellaneous Prose Works of Sir Walter Scott, Bart* (Volume 3), General Books
- 重松泰雄. 1979. 「評釈・『三四郎』」, 『国文学解釈と教材の研究』, 24巻6号, 5月. 學燈社. = 1994. 『漱石その歷程』, おうふう. pp.267-281.
- 清水茂. 1984. 「漱石に於けるジェーン・オースティン——「明暗」研究のための一覚書」 『比較文学年誌』, 第20号, 早稲田大学比較文学研究室.
- 清水茂. 1985. 「漱石に於けるジェーン・オースティン承前——「明暗」と”*Pride and Prejudice*”と」, 『比較文学年誌』, 第21号, 早稲田大学比較文学研究室.
- 助川徳是. 1978. 「漱石——その避けて通ったもの」, 『国文学解釈と鑑賞』, 第43巻11号, 11月. 至文堂. = 1983. 『漱石と明治文学』, 桜楓社. pp.36-51.
- 徳沢得二. 1964. 「『体験話法』研究の沿革」, 『文芸研究』, 11号, 3月. 明治大学文芸研究会.
- 徳沢得二. 1964. 「わが国における『体験話法』の研究」, 『文芸研究』, 12号, 11月. 明治大学文芸研究会.
- 山口治彦. 2009. 『明晰な引用, しなやかな引用』, くろしお出版.
- 依藤道夫. 2006. 「『ウェイクフィールドの牧師』についての研究」, 『英語英文学論集』, 34号, 都留文科大英文学会. = 2007. 『イギリス小説の誕生』, 南雲堂. pp.342-357.